

道南会場 鈴木秀夫 様



信仰を始めて20数年、ようやく念願の入峯修行に参加させていただくことができました。この行については、さまざまな方からアドバイスや体験談を伺い、心の準備を整えて臨みました。今回は、なぜ私が入峯修行に参加したのか、その思いをお話しさせていただきます。

昨年、会長より算命学のご指導をいただき、「これまでの三倍の行を行わなければ、エネルギーが病気を引き起こす」とのお言葉を頂戴しました。また、以前の御修行では、「大運の時期には何をしても結果が出にくい」とのお話もあり、どこかで自分の気持ちを抑えて過ごしていたように思います。しかし、会長のご指導により抑えていた気持ちが解き放たれ、さらに「みちの輪」名古屋第二会場の清水副会場主からの勧めもあり、今回の参加を決意いたしました。当日までの間、準備すべき物や名古屋空港からの行程表など、細やかにご案内い

ただきました。

前日に宿場に入り、翌朝早く龍泉寺にて大峯山入峯修行に向け心身を整えるため、水行を行いました。ふんどし姿で身体を叩いて温め、池の周囲は薄暗く、水の落ちる音が静かに響いていました。

以前から「水は冷たい」と伺ってはおりましたが、想像以上の冷たさに驚きました。ただひたすらに般若心経を唱えることに集中し、一心不乱に声を上げました。

宿場に戻り、初めて山衣体を身につける際には、声をかけていただき、手ほどきを受けるなど大変お世話になりました。

準備が整い、宿場を出発する際には、宿場に向かって整列し、出発の儀式が行われました。法螺貝が鳴り響き、般若心経を唱えた後、マイクロバスで登山口駐車場まで移動し、山に向かって再び般若心経を唱え、女人結界門をくぐって山道を進みました。山道を歩くことには慣れておらず、想像以上に厳しいものでした。

次に待ち受けていたのは、行場最大の荒行とされる「西の覗き」でした。肩に巻いた命綱をご先達に託し、両足を別の方に持っていただき、平らな岩盤の上に胸を乗せて、目が眩むような高さの絶壁を覗くという行です。自らの悪行を懺悔し、身を捨てる覚悟をもって臨むことに、この荒行の意味があるといえます。「もう少し前に出ていたら…」と想像するだけで足がすくみます。ただ一つ確かに感じたのは、私たちはすべての人、神仏、大自然、ご先祖様のおかげで生かされているという実感でした。

その後、真言宗当山派修験道の根本道場とされる秘所・小篠根本道場には、足の痛みがあり向かうことができず、大峯山寺で皆さんの帰りを待たせていただきました。下山のことを考え、無理をせず断念する判断をいたしました。

再び皆さんと合流し、大峯山寺で御法楽の後「裏行場」へと向かいました。目の前には岩盤の絶壁が立ちはだかり、「これを登るのか」と思わず声が出ました。しかし、先達の的確な声かけや、手の位置・足の置き場のご指導をいただき、思っていたよりもスムーズに登ることができました。

先達の方からは、「恐怖心が出ると、足も手もすくむ」とのお話がありました。また、「人は普段、四つん這いになることがなく、バランスを身につける修行でもある」とのご指導もいただきました。上に着いたときには、達成感と、写真でよく見るあの景色が目の前に広がり、爽快感に包まれました。

下山の際は、一步一步を慎重に踏みしめ、無心で、ただひたすらに「下へ、下へ」と意識を集中して降りました。時折、気持ちが弱くなりそうになると、法螺貝が鳴り響き、先達から「慚愧懺悔、六根清浄」と掛け念仏がありました。私たちは一心不乱に声を出し、意識を前へ前へと向けて身体を運びました。そのような気持ちにさせてくれる大合唱の力が、いかに大切であるかを実感いたしました。

無事に下山し、山に向かって渾身の力を込めて感謝を捧げました。感じたことは数多くありますが、山衣体を身に着けさせていただいたにもかかわらず、その意味や心構えが十分にできていなかったことを、恥ずかしく、深く反省しております。この思いを次にしっかりと繋げてまいります。

この度、参加をお認めいただきました会長に心より感謝申し上げます。また、今回会長はスケジュールの都合で一緒できなかったところ、亮成副住職が立派にお勤めくださり、大変お世話になりました。大塚僧正先達をはじめ、園田先生、そしてご同行の皆様方に心より御礼申し上げます。次回もまたお会いできますことを楽しみにしております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

横浜会場 荒川武士 様

三度目のエントリーで初めて大峯山入峰修行に行つて参りました。三度目の正直にて新客として登拝してきました。

行く前に、自分の人生で様々ステップアップのタイミングで今までお世話になっていた会社の後を継いでいく事になり、今の自分より更に器を大きくする必要があると感じていました。そんなタイミングで大峯山入峰修行の話が来ました。

かむながらのみちの先輩達や家族から、魂のレベルで生まれ変わってきな！と周りからの後押しもあり、参加する事を決めました。

今までのエントリーは周りから勧められて、何となく「じゃあ行くかな」くらいの動機でエントリーしていました。案の定、入峰修行には行けず、1回目エントリーは病。2回目はギックリ腰で参加まで至りま

せんでした。先輩達からは「山に呼ばれないと行けない、行けない理由がある、それも修行」と聞いていました。今回、入峰修行に参加して、先輩達がおっしゃっていた事がよく分かりました。

本部から大峯山に向かう道中から、だんだんと緊張してきました。単に山に登る事には昔よく登っていたし、体力には割と自信があったので不安がないと言えば嘘になりますが、そこまで懸念はしていませんでしたが、自然と身が引き締まる思いと、覚悟からくる武者震いに似た緊張感がありました。

山に入る当日の早朝、水行の時にふと空を見上げると満天の星と水行場の龍が私を見ているように感じ、4℃の水と合わさって身が引き締まったのを覚えています。

山に入る直前のお勤めの際、先達の方から「今日大峯山に入れるのは家族に何事もないから」と聞いた瞬間に、懺悔の気持ちと、併せて感謝がものすごく溢れて、胸がいっぱいになりました。その後、新客だったので表の行場、裏の行場、各場所でお勤めをする度に、先達の方からの言葉が刺さりまくりました。

行場では、文字通り一步間違えると死。若い時にヤンチャをしていたこともあり、ある程度の修羅場をくぐってきたつもりでしたが、想像を超えていました。今まで生きてこれたのは、本当に色々な方か



らの縁で支えられていたのだ、人を信用しても大丈夫なんだ、と感じました。それと同時に、自分でどうにかしてきたなんて怠慢だった、今までは周りが源だったのだと感じました。

家族に支えられ、仲間に支えられている事に感謝をし「感謝報恩」今まで支えてくれた家族、仲間、そして世の中にしっかりと感謝をし、恩返しして生きると決めました。

一緒に参加してサポートして下さった皆様、ありがとうございました。このご縁に感謝です！！

甲信会場 今津陽一 様



参加を決めた時、まずは修行に耐えられる身体づくりが必要だと思い、青年期の自衛官時代に行軍で味わった肉体的疲労や、腰・膝・足首へのダメージを思い起こしました。その経験を踏まえ、過去に行っていたランニングやウォーキングは関節への負担を考えて今回はあえて避け、新しいアプローチのトレーニングを重ねました。30年来の武道仲間であり、身体操作法のトレーナーにも相談し、自分の身体感覚と神経回路を呼び覚ましました。結果は予測できません

でしたが、やれることはすべてやり、あとは神仏に委ねる覚悟で出発当日を迎えました。結果的にはこの準備が功を奏し、身体的なダメージは想定より軽く済みました。

行きの車中では甲信会場の仲間と「行に入る際の心がけ」について語り合い、「水行の際には水と一体となるように行じる」という言葉が印象に残りました。「今回のテーマは対象と一体となること」と自分に言い聞かせました。

宿舎に着くころには長時間の移動で疲れていました。翌日からの修行に備え、しっかり身体を休めるつもりでしたが、慣れない環境のためになかなか寝付けず、これも修行の一環だと受け止め、静かに横になって過ごしました。結局ほとんど眠れないまま翌朝を迎えることになりました。

寝不足による頭痛を抱えて臨んだ水行では、呼吸を整え「自他の境界をなくし、水と一体となる」ことを意識しました。しかし心の乱れからか、思うような一体感は得られません。そのとき「経験者が多くを語らなかったのは、余計な先入観を与えないためではないか」と気づきました。次の山での修行では、自分の感覚に集中しようと心に決めました。

朝食後、いよいよ入山です。先達からは呼吸の大切さや山中での歩き方、水分補給の方法など、単なる登山とは異なる教えをいただきました。幸運にも先達の動きを間近で観察でき、その姿勢や足運び、リズムから学ぶことは多く、自らの身体操作との共通点を見いだせました。

各地での行を進める中で強く感じたのは、役行者をはじめ先人たちが命をかけて築いた修行の重みと、その場が放つ迫力でした。大峯山には、挑む者に人生の糧となる何かを与えようとする深い教えがあることを実感しました。

最終工程では暗闇の中、身体が自然に段差や傾きを察知し、足を運んでいました。参加者全員が「慚愧懺悔、六根清浄」と唱えながら呼吸を合わせ、心をつ一つにして最後まで歩きました。結界門をくぐり終えた瞬間、法螺貝の音が山にこだまし、美しく響き渡りました。そのとき、「よく成し遂げた」と大峯山に受け入れられ、新たな修行へ進めと励まされたように感じました。

その夜の夕食は格別でした。料理の美味しさもさることながら、やり遂げた達成感と仲間と酌み交わす一杯のビールの味は、生涯忘れられないものとなりました。何度も修行を重ねている方々が「毎回新たな気づきがある」と語っていた意味が、少し分かった気がします。私もまた、次の修行に挑みたいという意欲が湧いてきました。

今回の体験を通じて心に深く刻まれたのは、「体感したことを今後の人生に生かし、新たに生まれ変わったつもりで歩いていけ」という教えでした。この思いを胸に、これからの人生を進んでいきたいと思えます。

甲信会場 中島 昌伸 様

この度、新客として大峯山入峰修行に参加させていただきました。

今年に入り、多くの方々から大峯山への登拝を勧められておりましたが、登山の経験もなく高所も苦手な私にとっては、とてもやり遂げられるものではないと感じ、当初は参加を見送るつもりでいました。

しかし、5月度の不動尊例祭に参列させていただいた直後、突然「大峯山に行かなくてはならない」という使命感のような思いが湧き上がってまいりました。これはきっと何かのお導きであると感じると同時に、その日が偶然にも、4年前に天国へと旅立った息子の月命日であったことから、「息子と一緒に修行をやり遂げたい」という強い思いが芽生え、参加を決意いたしました。

当日は、朝4時より龍泉寺での水行から始まりました。そして「今日一日、何が起きてもすべてを受け入れる」という覚悟を胸に、6時に女人結界門をくぐりました。

道中では、休憩時以外の会話が一切禁じられていたため、黙々と歩きながら、これまでの人生を静かに振り返っておりました。また、休憩所や神仏が祀られている場所では立ち止まり、祈りを捧げるたびに、大塚先達よりいただくお言葉の一つひとつが胸に深く響きました。

これまで「分かっていたつもり」でいたことが、実はどれほど浅かったかを思い知らされました。自分がこれまで様々なことに全力を尽くしてこられた背景には、家族の支えがあり、両親の見守りがあり、多くの方々の助けがあったという事実を、改めて気づかされました。そして、それらに対する感謝の気持ちが、自分にはまだまだ足りていなかったことを痛感いたしました。

各行場にはそれぞれ意味があり、まるで人生を物語っているかのように感じられました。

「鐘掛岩」では、どれほど困難な局面であっても、一歩ずつ正しい道を選び進んでいけば、必ず道は開けるということを体感いたしました。

「西の覗き」では、自分一人では決して見ることでできない景色も、人を信じ、互いに助け合うことで初めて見えるのだということを教えられました。

「蟻の戸渡り」では、集中力と慎重さが求められる一方で、恐怖心に打ち克ち、一歩を踏み出す勇気が試されました。



そして「平等岩」は、まさに最後にふさわしく、これまでの行場をすべて集約したような難所でした。先達のお話によれば、熟練の先達であっても、この岩を回る際には新客と同様に、同じ岩に同じ手足を順番通りに掛けなければ進むことはできないとのこと。そして、一步でも足を踏み外せば、そこは奈落の底——。人生の終わりにおいては、どんな権力者も富裕な人も皆等しく、すべての人が平等であるということを、改めて深く胸に刻みました。

表・裏すべての行場を修行させていただき、18時過ぎに下山するまでの約12時間、参加者全員で「慚愧懺悔、六根清浄」と唱えながら、心を一つにして歩いた約30キロの道のりは、数々の学びと気づきを得られた、かけがえのない体験となりました。

今の自分が大きく変わったかと問われれば、まだそうとは言えないかもしれませんが。しかし、いつかきっと「大峯山での修行がきっかけで自分は変わった」と思える日が来ると、確信しております。

また、息子がよく口にしていた『あたり前のことこそ感謝する』という言葉の真意を、これまで以上に深く理解することができました。そうした意味でも、今回の修行の目的は果たせたのではないかと感じております。

このような貴重な機会を与えていただき、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

甲信会場 堀内 朋孝 様

この度は、大峯山入峰修行に参加させていただき、誠にありがとうございました。

また、北川亮成様、先達の妙法寺・大塚知明様、空海院・園田長隆様には、先達としてご指導いただき、心より御礼申し上げます。

膝の持病が心配ではありましたが、今回の参加にあたり、皆様にご迷惑をおかけしては申し訳ないと



思い、事前にトレーニングをして臨もうと考えておりました。しかし、思うように準備が整わず、満足なトレーニングもできないまま当日を迎えることとなりました。

当日の朝は、4時起床からの水行で始まりました。暗闇の中で入水した瞬間、足が低水温により感覚を失い「やばい！」と思いましたが、次第に体に膜が張ったような感覚になり、水温に慣れていくうちに、心身が清められていくように感じました。

朝食を済ませ、いよいよ入山。妙法寺・大塚知明様の車に乗せていただき出発。大橋茶屋（女人結界門前）にて無事の帰還を祈り、登拝が始まりました。一步一步踏みしめながら登っていく道のりは、何か新鮮で清々しさがありました。

行場では岩を登りながら、死と隣り合わせの場面を何度も体験し、自分自身の罪穢れと向き合う時間となりました。この世とあの世——一步踏み出せば確かに死という境があり、いかに冷静に自分を保ち、体をコントロールするかが問われました。恐怖に負ければ体は動かなくなり、望む動きはできなくなる。いかに恐怖を捨てるかが、修行の要であったと感じます。

足の不安もあり、私は大峯山寺で一行を待つことを選び、約1時間半の休憩を取りました。その後、一行と合流し、大峯山寺の中を見学させていただき、貴重な体験を得ることができました。

その後は下山。膝とうまく付き合いながら降りるだけだと思っていましたが、人生はそう甘くはありませんでした。すぐに裏修行場へと向かうこととなり、さらに素晴らしい体験をさせていただきました。

午前中以上に死と隣り合わせとなる場面が続き、「ここで手を離したり足を滑らせたなら人生が終わる」と思いながら、必死に足元・手先に集中して裏修行に取り組みました。

「人は平等である」——偉い人も、そうでない人も、お金のある人も、ない人も、地位のある人も、ない人も。ここで手を離したり足を滑らせれば、皆等しく命を落とす。そのお話を伺い、改めて人生における人との接し方を考えるきっかけをいただきました。

そして無事に新客全員が裏修行を終え、全員と合流して下山の帰路へと向かいました。下りでは左膝の痛みがひどく、苦痛との戦いとなりましたが、「これは人生で犯してきた罪穢れが痛みとなって現れているのだ」と心に言い聞かせながら、歩みを進めました。

その後の精進落としては、おいしい料理とお酒をいただき、楽しいひとときを過ごさせていただきました。

今回の大峯山入峰修行は、精神と身体を鍛える貴重な経験となりました。また次回もぜひ参加させていただきたいと思っております。皆様、本当にありがとうございました。

甲信会場 三澤剛明 様

本年は修験実証の年。年甲斐もなく勢いにまかせ、今回、大峯山の登拝に参加させていただきました。皆様の後押しと応援のおかげで、なんとか無事に完歩することができました。誠にありがとうございました。私の人生においても、一つの大きな山を越えることができたと感じております。

修行は龍泉寺での水行から始まりました。初めてのふんどし姿で冷たい水に身を沈め、般若心経をお唱えし、心身を清めました。その後は、怒涛のように危険や苦難がわが身に襲いかかり、何度もくじけそうになり、泣きたくなるような場面もありました。しかし、行を終えるたびに、充実感と達成感が湧き上がり、生きていることのありがたさを深く実感いたしました。

当初は登山の延長のようなイメージを抱いておりましたが、いやいや、そんな生易しいものではありませんでした。危険な岩場や崖を乗り越えなければならず、最初の難所「鐘掛岩」では、鎖を握りしめ、歯を食いしばり、滑る岩に足をかけ、垂直の姿勢でまさに命がけで登る必要がありました。ところが、後で伺ったところ、これはまだ序章であり、体慣らしの段階に過ぎなかったとのこと。驚きました。



当日は天候にも恵まれ、奈良・和歌山の山々は緑に染まり、見下ろせば所々に集落が点在し、大パノラマが広がっていました。山頂では素晴らしい景色が眼前に広がり、ひととき仙人にでもなったかのような、心地よい気持ちに包まれました。

特に印象に残っているのは、表行の「西の覗き」です。本当に怖かったです。ロープに身を預け、岩から身を乗り出して宙ぶりの状態で崖下を見下ろしました。先達の問いかけに、今までの行いを悔い改める思いで、ただ「はい」と返事をするばかりでした。

山頂の大峯山寺では秘仏「秘密の行者」を拝し、護摩法要に参列いたしました。参拝を終え「これで修行も終わりか」と安堵したのも束の間、帰り際に新客は右の脇道へと進み、裏の行場へと向かうこととなりました。ここからが本番でした。

裏行では鎖もなく、右手・左手・右足・左足と、全身を使って体勢を入れ替えながらバランスを取り、登っていきました。後戻りはできません。蟻の戸渡、胎内潜り、平等石など、数々の難所を経て、文字通りの荒行を体験することができました。これもすべて、先達のご指導とお導きがあってこそ成し遂げられたことです。深く感謝申し上げます。

森羅万象の大自然に抱かれたお山の中で、見ること、聞くこと、触れること、匂うこと、感じること――すべてが初めての体験であり、驚きと恐怖、そして喜びの連続でした。命と向き合い、自然と向き合い、自分自身と向き合う一日でもありました。

今も耳に残っているのは、「慚愧懺悔、六根清浄」の掛け声。登る道々、下る道々、何度となくその声に勇気づけられました。修験の道は険しく、そして奥深いものでした。役行者の御徳に、少しでも触れることができたことに心より感謝申し上げます。

天河弁財天にて参拝を終え、すべての修行を無事に終えることができ、全員が無事に帰路につけたことを、心からうれしく思っております。ありがとうございました。合掌。

富山会場 杉本綱己 様

この夏、私は義父と義弟、そして総勢三十名の仲間と共に、大峯山で三日間にわたる修行に参加いたしました。普段から義弟とは登山を共にしておりますが、義父と一緒に歩むこと、さらに大人数の中で修行として挑むことは初めてであり、心のどこかに緊張と期待が入り混じっておりました。

登拝の道は想像以上に険しく、急峻な岩場や鎖場が続き、体力と気力を削られました。義父は落ち着



いた足取りで一歩一歩を大切に進み、その背中には、年齢を重ねたからこそその重みと覚悟が感じられました。義弟は時に弱音を漏らしながらも、挑戦心を失わず果敢に前へ進みます。私はその間に立ち、支えるように、あるいは励まされるようにしながら歩を重ねました。家族の関わり方が山道の中で自然に形を変え、互いを支え合う関係へと深まっていったことを実感いたしました。

また、三十名の仲間と共に列をなし、読経を響かせながら進む時間は、普段の登山では得られない一

体感に包まれておりました。険しい場面では互いに声を掛け合い、手を差し伸べ合う。初対面でありながら心が通じる瞬間が幾度も訪れ、素敵な出会いの数々が胸に刻まれました。苦しみを共有することで、人はこんなにも早く心を通わせられるのだと、驚かされました。

山頂に立ったときの景色は、努力を重ねた者だけに与えられるご褒美のようでした。雲間から差す光に照らされた山並みは神々しく、祈りを捧げるその時間は、日常の些細な悩みをすべて包み込み、洗い流してくれるように感じられました。

下山を終えた後には、修行を共に過ごした仲間との交流をさらに深める時間がありました。食事や語りの中で、それぞれの思いや苦勞、学びを分かち合うひとときは、夏休みの終わりに感じるあの淡い哀愁を思い起こさせました。「もう少しこの時間が続いてほしい」「別れが名残惜しい」——そんな気持ちが胸に広がりました。

三日間の修行を通じて、私は「自ら挑戦する姿勢を持ち続けること」の大切さを強く感じました。義父の落ち着いた強さ、義弟の挑戦心、そして仲間たちの励ましや支え。それらすべてが、自分の心を新たにしてくれました。この体験を忘れず、日々の生活の中でも挑戦を恐れず、歩みを進めてまいりたいと存じます。

富山会場 水上大輔 様

私はこの夏、大峯山での修行に初めて参加いたしました。きっかけは父の紹介で、以前から義兄と登山に出かけることが多く、その話を父にしたところ、大峯山での修行を勧められ、義兄とともに参加することとなりました。

修行には、私・父・義兄のほかに、共に修行する仲間が30名おり、「どのような修行になるのだろう」と期待する一方で、正直なところ、最初は「ちょっとした山登りの延長」くらいに考えており、「修行」という言葉にもどこか軽い気持ちで臨んでいました。しかし、その考えがいかに甘かったかを痛感することとなりました。

特に忘れられないのは、裏行場で足を滑らせてしまった時のことです。もし踏ん張れなければ谷底へ落ちていたかもしれない——その恐怖は、今思い出しても背筋が凍るほどです。とっさに踏ん張り、すぐ後ろにいた義兄が服を掴んでくれたことで滑落を免れましたが、心臓は激しく鼓動し、全身が冷や汗に包まれました。その瞬間、修行を先導してくださった大塚住職が登拝前におっしゃった「修行中は私の言うことは絶対」という言葉が頭をよぎりました。最初はその言葉の重みを理解できていませんでしたが、滑落しかけたその時、大塚住職のご指導に従わなければ、次は大怪我では済まされないと強く実感いたしました。

裏行場を終え、下山中に足を痛めてしまい、歩くのがやっとの状態になりました。最初は我慢して歩こうとしましたが、痛みは増すばかりで、一步踏み出すたびに顔が歪みました。しかし、大塚住職の先



導のもと、30人全員で声を合わせて唱和を続けることで自らを鼓舞し、なんとか下山することができました。

下山後は、共に修行した仲間と食事を通じて交流し、それぞれが修行中の出来事を語り合いました。互いの苦労を笑い合いながら分かち合うことで、同じ試練を乗り越えた者同士の一体感が生まれました。

大峯山での修行は決して楽なものではなく、時に命の危険を感じるほどの厳しさがありました。しかし、その厳しさの中にこそ、大きな学びと喜びがありました。今回の体験で得た気づきや心構えを忘れず、今後の生活の中でも活かしてまいりたいと存じます。

富山会場 山本直輝 様

私は大峯山での修行に参加しました。初めての経験だったので、始まる前から不安と緊張で胸がいっぱいでした。しかし、実際に挑戦してみることで、自然や人とのつながりを強く感じる事ができ、これまでにない学びを得ることができました。



朝4時に行なった水行は、特に心に残っています。胸まで冷たい水につかると、体が小刻みに震え、息が苦しくなりました。真っ暗な中で水の冷たさが全身を包み込み、死んでしまうと、死を身近に感じました。今回の修行の中で一番厳しく、苦しいなと感じました。しかし、その分、生を実感し、生きているという日々に感謝をしなければいけないと思いました。

その後、大峯山へと入峰し、その道のりも、とても厳しいものでした。急な坂道や岩場が続き、息が上がって足が重くなり、何度も立ち止まりたくなりました。それでも顔を上げると、木々が太陽の強い光をさえぎり、柔らかな土が足を支えてくれていました。「慚愧懺悔、六根清浄」という掛け声と共に登ることで不思議と気持ちが落ち着き、自然や人との繋がりそのものが私を守り、導いてくれているのだと感じました。そう思うと疲れた体にも力が戻り、一步ずつ前へ進むことができました。自然と人との縁はとても深く、切り離すことができないものなのだ実感いたしました。

一番心に残ったのは、裏行場での修行です。断崖絶壁を登るときには、足を踏み外せばそのまま命を落としかねないという恐怖が常にありました。緊張で手に汗がにじみ、心臓が早く打つのを感じながら、一步一步に集中しました。そのとき強く思ったのは、先達の方の言葉をしっかりと聞き、素直に従うことの大切さです。「人の言うことを聞かなければ本当に死んでしまう」という状況の中で、普段の生活でも、人の意見や助言に耳を傾けることが如何に大切かを学ぶことができました。

こうして大峯山での修行を終えて振り返ると、自然の厳しさやささしさ、そして人と人との縁を深く感じた時間だったと思います。水行や登拝、裏行場での体験は、決して楽なものではありませんでしたが、その分心に刻まれる学びがありました。この体験は、ただの思い出ではなく、これからの自分の生き方を考えるうえで、大切な道しるべになると感じています。

名古屋第2会場 守屋正俊 様

まずは、大峯山入峰修行の無魔成満に際し、心より御礼と感謝を申し上げます。
貴重な体験を通じて、数多くの気づき・学び・ご縁をいただけたこと、また支えてくださったすべての方々に深く感謝いたします。

年初の会長のメッセージより「乙巳は脱皮・挑戦の年にしよう！」を意識して大峯修行への参加を申し込みました。

8月30日は、56歳最後の日（翌31日が誕生日）であったため、私利私欲を優先してきた生き方や、雑な生活習慣を改める機会と捉え、修行に臨みました。

前日、妻に「自分のことしか考えていないから、少しは人のことを考えられるように修行してくるね」と伝えたところ、「ほんとだね、自分のことしか考えていないから、いい機会だね」と言われ、少しイラッとしましたが、妻が快く協力してくれたおかげで、参加が叶いました。

大塚先達様より、入山の心得として「今日ここに来られたことへの感謝、お父さん・お母さんのこと、自分の願意を考えて挑むように」とのお言葉をいただき、改めてその意味が心に沁み入りました。



入峰修行中、「西の覗き」の行は想像を超える体験となりました。両肩に掛けたロープは地面に繋がっておらず、両足を支えてくださっていた大塚先達と亮成さんに命を預ける状態でした。

行が始まり、身がどんどん下へと吊り下げられていく中で、心の叫びが聞こえてきました。「自分がやっている、できていると思っていたことは間違っていた。周りの人にやってもらっている、支えてもらっているからこそ、できているんだ」と。そして、「妻にごめんね、みんなありがとう」という気持ちが自然と湧いてきました。

裏の行場では、大自然の素晴らしい景色の清々しさとは裏腹に、手・足・体のバランス力と精神力を試される緊張感の中、「無理、無理、無理でしょ、やばいよ～」との心の叫びが聞こえました。しかし、60代後半の先輩方が勇ましく岩を登り、裏岩を渡る姿に勇気をいただき、私もやり切ることができました。

また、大塚先達のご指示通りに岩を握り、足を運ばなければ命を落とすと感じました。人は皆、影響力を持つ尊い存在であること、素直になることの大切さ、自分を信じて身を委ねること、そして自分できないことは人を信じて任せることの大切さを、体験を通じて深く実感いたしました。

下山の際には足腰に痛みが出ましたが、皆で声を掛け合いながら一体となって歩き続け、無事に全員で修行を終えることができました。

今回の体験を通じて、自分は「生かされている存在」であり、「果たすべき役割がある」ということを実感いたしました。

周囲の人々、地域、社会に少しでも役立つ人間として、生まれ変わった思いで、これから精進してまいります。誠にありがとうございました。